
空の園

迷走

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の園

【Nコード】

N4074BA

【作者名】

迷走

【あらすじ】

いつも通りの日常、いつも通りの家で、いつも通り寝て、いつも通り起きた、はずだった。

目を開けた先まずみたのは見知らぬ天井。ぎょっとして飛び上がれば自分の手は白く小さい丸い手になっていて――あれ、ついでに他ん所も

変わってる？どうやらトリップしたようだと気が付いたのは、それから数日後。まるでゲーム世界みたいだな、と気が付いたのは更に数年後だった。※主人公は脇役です。他者の視点が多くなる可能性

があります。

0. 5 トリップさせられました (前書き)

この作品は設定上、BL要素が入る可能性があります。
しかし話には最低限しか入れる予定はございません。
ご了承ください。

0.5 トリップさせられました

美しい、汚れなど一つも見当たらないのに歴史を感じさせる、人の身長は何倍あるうかと思うほどの大きな門。

見慣れきった、しかし実際に見るのは初めてのこの門は、前に立つだけで、

見るだけでかなりの疲労を感じる。

中は至って普通なんて言葉絶対使えないような学校だ。

まだ見ぬその姿を思い浮かべて、一人ため息を吐いた。

外から見れば最初にも言ったとおり美しい。存在感もバンバン出るし、綺麗だし、

近寄ってみればその門に描かれた細かな模様は見事としか言いようがない。

画面越しには感じられなかったその模様も、質感も、触ってみればすぐに確かめられる。

そう。自分は知ってるんだ。”画面越し”ディスプレイに見たこの門を。中に入れば、

通常の間には檻と変わんないってことも。

この門を最初に見たのはいつだったか。

……いや、現実逃避はやめところ。うん。

実際にはオープンに腐っている親友から、無理やり渡されたゲームを何も知らずに

プレイしたあの日のこと今でも昨日のこのように思い出せる。

今思ったらアイツは自重って言葉を知らなかったな。

なんであの時の自分は素直にプレイしたんだ。馬鹿なことしたわ。

なんで思い出せるかって？ そんな理由は簡単。最初「あ、絵柄が綺麗なゲームだなあ」なんて腐った親友と

話してたら、その最初のあらすじってのか、主人公のこの学校の説明だったので、

衝撃的すぎて愕然としたからだよ。

なんだよ王道学園って！ 知らねえよ！ いや、アイツの所為で人よりは詳しいと思うけどさ。

ああ、本当、興奮したアイツをみたときに止めればよかったんだ！

無駄に強情なアイツが、「だってお前と主人公似てんじゃない！ やんなきや損じゃん！ こう、なんか感じないの！？ 似た顔の癖に！」とか喚き散らしたせいで

結局最後までプレイする羽目になったんだが。

今思い出しても訳分からん。感じるわけねえだろうが。むしろキラと似てたところなんて

髪と瞳の色ぐらいのもんだっただろ。

ゲームをクリアしてから時間が経って。高校2年生だった俺たちも、高校3年生へと進級した。

季節も移り変わって、春。クラスも変わって今はみんな新しいクラスになじむかなじまないかのあたりでうろうろしてる季節だ。新1年生たちはようやく緊張がほぐれてきた頃だろうか。

クラスにはもう初対面なのにそうは思えないほど仲良くなってる奴もいる。

俺たちが通う学校は桜の木が多い。春、入学式では花見のスポットと騒がれても

おかしくないぐらいの満開の花びらが咲く。

それをみてふと、俺はあのゲームの主人公のことを思い出した。

あのゲームの主人公は、少し変わった時期に来たことで目立ってしまった編入生の設定だった。

思い出したのは、多分あのゲームの中でみた桜の美しい光景と今の場が重なって見えるからか。

色々複雑な事情があった主人公が編入してきたのは、まわりがそのクラスに馴染み始めたであろう今くらい。

確かその主人公は高等部1年になるときに来たはずだから、リアルだったら多分緊張も

新しい学校ってのも相まって結構なストレスもんだっただろう。自分だったら耐えられる気がしない。

——ちよつと背後遠くの方から、親友が俺を呼ぶ声が聞こえてくる。

あのゲームのことを考えたからか？なんて馬鹿な事を思いつついつものごとく答えるつもりでくると振り返って、

「……は？」

ぐらり、と揺らいだ視界に困惑した。めまい？いや、違う。

これは。

遠くからいつもみたいにヘラヘラ笑ってた顔に驚愕の色を貼り付けて、

駆け寄ってくる親友の姿が見える。見たことがない表情。

なんでそんな顔をするんだろう。

嗚呼、何が起こってるのかわからない。なんだ、この怒濤の展開は。

体から血の気が引く。さあっと末端部分から冷えていく奇妙な感覚が気持ち悪い。

視界だけでなく、平衡感覚までダメになったのか、足元がおぼつかない。

視界が黒く染まり始める。そこでようやく、「やばい」とただ思った。

手が伸びる。親友がいるほうに。自他共に認める逃げ足の速さを最大限に生かして走ってきた親友が、すぐ近くまで来ていた。だけど、その手が親友に届いたかどうかまでは分からない。

意識が、飛ぶ。

今の俺の現状。もうお気づきの方も多いんだろうけど、アレだ。

——ゲームの中に、トリップしちゃいました。

0.5 トリップさせられました (後書き)

勘違いしているようなら申し訳ないので言わせていただきますと、これは主人公視点ではございません。

○○・5などの微妙な数字は他者視点にしていくつもりです。

※実際にこの話出てくるゲームは存在しません。

設定

ゲームは、全年齢対象のBLゲーではあるけれど恋愛＞＞友情戦闘メインのものとしています。色々ぶち壊し感が拭えませんが、この設定上BL要素は少なからず含まれる予定です。

01 転生した先は（前書き）

ようやく主人公視点。

なんというのか、何度も何度も書き直した結果がコレです。

ちよっとシリアス要素が導入されますが、話は別にシリアスにするつもりはない：

ギャグにもならんかも知れませんが。

01 転生した先は

そのとき、私はいつも通りだった日常が終わったことを知った。

でもそれは、直接誰かにそう言われたわけでもなければ、希望を失ったわけでもない。

ただ漠然と、ああ、もう戻ることはできないんだと本能が悟っていたんだ。

01 転生した先は

ふわり、

風が頬を撫でる。揺れた髪は私の肌をくすぐり、それを合図に私の意識は急速に覚醒へと向かい始めた。

夢から引き戻されたばかりの感覚は、次いで今の私の現状を確認し始める。私が座っているのは、どこかしつとりとした芝生の上。背を預けているのはしつかりとした硬い木の幹。さらに遠くからは聞きなれた無数の声が聞こえてくる。

ああ、”僕”は寝てしまっていたのかと閉じたまぶたの心地よい闇の中眩く。

寝る寸前まで溜りに溜まっていた疲労が今では程よいものへと変化している。体が重くて動けなかったはずなのに、どんな回復力なんだか。

そういえば、と体全体に神経をめぐらせてみるが、どうやら怪我はしてないらしい。本当に疲労だけだったみたいだ。

うん。動けるね。

たとえ動けなかったとしても、いつまでもここで寝てるわけにはいかないのでゆっくり目を開けるが、急に飛び込んでいた鋭すぎる光におもわず目を細めた。
明るすぎて何も見えない。これは目になじむまでこれは時間がかかりそうである。

そう結論付けると再び木の幹へと背中を預け、はあっと大きく息を吐き出した。緊張のせいだろうか、体中に籠っていた力を意識してだらりと体中から力を抜く。

「懐かしかったなあ…」

ぼつりと呟いて、そこでまた、本当に懐かしかったなと改めて思う。思わず起きたときに過去と今がごっちゃになってしまっていたじゃないか。

ほんとう、懐かしい夢だ。それは僕が”私”であったときの記憶。いつも通りがそうでなくなってしまった日の、記憶。

もう十数年も経つけど、あの人生最大のパニックに陥った日のことを僕は一生忘れることができないだろう。

今だって昨日のここのように思い出せるんだから、できるできない以前の問題のような気もしてくる。

—— 十数年前の僕は、17歳である僕より年上の20歳越え、成人女性だった。

なんていったところで誰が信じてくれるだろう。ああでも、もしかしたら信じてくれるかな？

いやいや、多分ふつうに「頭大丈夫か？」なんて心配されるに違いない。それこそ真面目な顔をして。

そう思えば思うほど笑えてしまって、小さく声を漏らす。かすれた笑い声だ。ダメじゃないか。これじゃ、皆が心配する。

そういえば、あの何もかもが変わってしまった日ほど”現実リアリティは小説より奇なり”って言葉に全力で納得してしまったことはなかったね。ずっとそんな風に思うことがあるわけないだろうなんて考えてたから、この状況に立たされたときまず浮かんだのがその言葉だった。

今思えばなんて緊張感も危機感もなかったんだろうね。この世界はそんな安全な世界じゃないのに、幸運だったとしか言いようがないよ。

十数年前の私は、それはもうバリバリの社会人で特に彼氏とかいたわけでもなく、一人暮らしで悠々と暮らすただの一般人。
若い頃は、そりゃぞくにいわれる厨二病とかいうやつを少し患っていたけれど今ではどこまでも現実主義者な面白みのない大人だったはずなんだ。

そんな私が体験したのは、この、転生に近い別世界へのトリップ。

目を開けば映る緑。青。木も、芝生も、空も何もかも一緒だ。
海も見に行った事がある。透き通った、見たことがないような綺麗な色をしていたけど、
それはまさしく海だった。間違えようもない自然。みたことのある、自然。

ただ違うのは、自分自身と、周りの環境と、常識だけで。

———ダメだ。

僕の中の何かが、そう呟いた。これ以上は考えてはいけない。これ以上は深くもぐってはいけない。
それに僕は逆らうことはしなかった。僕この体の直感には従ったほうが利口だと知っているから。

もう目は十分光に馴染んでいた。さて、そろそろ体を起こそうか。遠くから聞こえる無数の声は今もやむことなく僕を探している。

少し勢いをつけて立ち上がれば、僕を慰めるようにふいていた風が止んだ。気まぐれな風は、

僕が大丈夫だって気がついたからもうどこかに行ってしまったらしい。ありがとう、と一言呟いて声の方へと歩き始める。

「さあ、帰ろうか」

あのとある一部の生徒からしたら、牢獄にも等しい学園へ。

自分を迎え入れてくれる、自分の命を守る術を教えてくれる学園へ。

そして、無事帰って、汗を洗い流したら、今日はもう寝てしまおう。

寝てしまえば、懐かしい夢なんて、もう手に入らない日常なんて忘れられる。

歩くたびに湿った音が響く。緑色の大地は、すがすがしいほどに快晴の空とは反対に所々赤黒く染めている。

すべて今、僕が奪った命の欠片。この世界では魔獣なんて呼ばれる、元の世界にはいなかった寧猛で、凶暴な生き物の亡骸。

これが物語りのはじまる、数日前のできごと。

01 転生した先は（後書き）

もしかしたら大きく変わるかもしれない話。

誤字脱字、意味が分からないところや説明不足だと思ったら、
ご指導、ご指摘お願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4074ba/>

空の園

2012年1月13日21時51分発行